

竹原義二の住宅作品における「余白」の概念及びその設計手法

現代建築作品における「余白」の概念に関する研究（その2）

The Concept of “YOHAKU” and Its Design Methods in Residential Works by Yoshiji Takehara

A Study on the Concept of “YOHAKU” in Contemporary Architectural Works (Part 2)

○井上真彦（神戸大学大学院、株式会社 Marginalio）^{*1} 末包伸吾（神戸大学大学院）^{*2}
増岡亮（大阪工業大学）^{*3} 後藤沙羅（神戸大学大学院）^{*4}

^{*1} Masahiko INOUE, Graduate School of Eng., Kobe Univ., 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 6578501, mi@marginalio.com

^{*2} Shingo SUEKANE, Graduate School of Eng., Kobe Univ., 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 6578501, suekane@people.kobe-u.ac.jp

^{*3} Ryo MASUOKA, Osaka Institute of Technology, Chayamachi, Kita, Osaka, 5308568, masuoka28@gmail.com

^{*4} Sara GOTO, Graduate School of Eng., Kobe Univ., 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 6578501, saragoto@people.kobe-u.ac.jp

キーワード：現代建築、余白、住宅、竹原義二

1. 研究の背景と目的

「余白」は本来、「文字などを書いた紙面の、何も記されていない白いままで残っている部分」¹⁾を指すが、その意味は紙面の語義に限らず広がっている。しばしば東洋文化・日本文化の特質を表す際に用いられる一方で、マレーヴィチのシュプレマティズムにおける「白い地」の重視にみられるように、近代美術・思想にも接続する概念である。

建築においても、「余白」の重要性は繰り返し語られてきた。必要とされる機能を満たすだけでなく、「余白」を設けることにより、建築がより豊かになり得るという考え方である。しかし、1968年以降の日本の現代建築に限っても、「余白」によって志向される空間や現象、そしてそれを実現する設計手法は、建築家や作品によって多様である。

本研究は、この多様な現れを俯瞰し、現代建築における「余白」の概念構造と設計手法を整理した上で、さらなる可能性を探ることを目的とする。前稿の『現代建築作品における「余白」の概念に関する研究（その1）』²⁾では、『安藤忠雄による1977年から1983年までの建築作品における「余白」の分析』として、安藤忠雄（1941-）の用いる「余白」の概念構造を明らかにした。本稿では、『その2』として、現代を代表する住宅作家であり、継続的に「余白」に言及してきた竹原義二（1948-）の住宅作品における「余白」の概念及びその設計手法を分析する。

2. 「余白」の概念に関する一般的考察

本章では、「余白」の概念と意味の一部が重なりうる近接概念（空白・虚・無・地・間）も暫定的に参照し、2.5節で「余白」の概念との異同を整理したうえで、2.6節で本研究における「余白」の概念を定義する。これにより以降の分析枠組みを明確にする。

2.1. 東洋文化・日本文化における「余白」

美術史家の岡倉天心（1863-1913）は、虚の効用を説いた老

子の例えを引きながら、虚の原理が日本文化において様々に応用されていると述べた。芸術創作においても、“作品のうちのなんらかを表現せず、空白のまま残しておくことによって、鑑賞者はその空白を自分流に補い、最終的に作品内容を仕上げる機会を与えられるのであり、偉大な傑作は、このようにして鑑賞者の注意をひきつけ、ついには、鑑賞者は自分が作品の一部になってしまったかのように思われてくるのである”³⁾といふ。

比較人文学者の大久保喬樹（1946-2020）は、岡倉天心の説くこの暗示の効用の端的な例として墨絵を挙げ、桃山期の画家、長谷川等伯の『松林図屏風』における松の木立の群れを包むように広がる茫漠たる空白の空間は、眺めつづけることによって、“無限に多彩で豊穣な美の感覚を見る者たちに呼び覚ます”と“余白の美学”を論じている⁴⁾。

2.2. 哲学における「余白」

哲学者の西田幾多郎（1870-1945）は、西洋と東洋の文化形態の違いを、“有を根拠と考えるものと無を実在の根拠と考えるものとに分かつことができる”とし、“無形の形、無声の声ということは、何物にもないと云うことではない。現在に有るもののが知的に限定できない意義を有つということである。無限なる情の表現であるということを意味するのである。(中略)それは無限に動くものである。”⁵⁾と述べている。

フランスの哲学者ジャック・デリダ（1930-2004）は、テキストの「余白（margin）」には、“いかなる現前的な指示作用の中心も持たない、もろもろの差異ある力からなる織物が存在している”⁶⁾と述べ、“全体性を超越する無限の問題”⁷⁾として扱った。

2.3. 近代美術・現代美術における「余白」

シュプレマティズムを提唱した美術家であるカジミール・マレーヴィチ（1879-1935）は、自作『黒の正方形』について、“白い地の上の黒い正方形は無対象の感覚の最初の表現形式であった。正方形とは感覚、そして白い地とはその

感覚の外にある「無」である”⁸⁾と述べ、白い地を受動的背景ではなく、感覚の形象化に必要な要素として強調した。また、もの派を代表する美術家の李禹煥(1936-)は「余白」について、“有と無が関係し反応しあい、そこで生じる場の力の現象”⁹⁾であると論じている。

2.4. 近代詩・前衛詩における「余白」

フランスの詩人ステファヌ・マラルメ(1842-1898)は、自身の詩篇『賽の一振り』(1897)における活字サイズの変化・行の散在・紙面の白(blancs)による版面構成について、“用いられているさまざまな種類の活字が持つ性質と、さまざまな余白の位置とが、音楽的な音色と間の代わりとなつてゐる”¹⁰⁾と述べた。

前衛詩を牽引した詩人、北園克衛(1902-1978)は、視覚詩において文字配置と紙面の白地を重要な要素として扱い、評論家の金澤一志(1959-)は、“そうした「間」の演出こそが北園の真骨頂であり、感動が発動される現場であった”¹¹⁾と評している。

2.5. 「余白」の近接概念との異同

空白：“①紙面などの、書いてあるべき部分に何も書いていない白い所。転じて、②あるべきものが何もない、または何も行われていないこと。空虚。ブランク。”¹²⁾を意味し、「余白」に比して、「埋められるべきもの」という含意が強い。

虚：“①中身のないこと。事実でないこと。‘‘実’’。”¹³⁾を意味し、「余白」に対し、より抽象的な、実体・事実の欠如を指す。

無：“①のないこと。存在しないこと。欠けていること。②益がないこと。無駄。”¹⁴⁾を意味し、「余白」が存在する部分なのに対し、「無」は存在自体の欠如を指す。

地：“③後に加えられたものに対して、基本的・本質的なもの。[中略]④加工する前の材料や土台。紙・布などの模様のない部分。”¹⁵⁾を意味し、「余白」に比して、「地」はものの背景・基盤的な含意がある。

間：“①物と物、または事と事のあいだ。あい。間隔。⑦あいだの空間。すきま。[中略]⑧あいだの時間。ひま。いとま。”¹⁶⁾を意味し、空間的・時間的な間隔を指すのに対し、「余白」はより曖昧な、何もない状態で残っている部分を指す。

2.6. 本研究における「余白」の概念の定義

これらの一般的な考察をもとに、本研究では「余白」の概念を次のように定義する。

- ①「余白」は本来「紙面の何も記されない部分」を指すが、紙面での語義に限定されない。
- ②「余白」は何かで埋められることを前提とせず、未決定の場として解釈が更新され得る。
- ③「余白」は物と物のあいだに限定されず、配置や省略といった操作によって構成される曖昧な領域である。
- ④「余白」は有と無の相互作用が生じる場であり、固定的な中心を持たない。
- ⑤「余白」は観察者・行為者の想像・解釈・参与を促し、ときに感覚を喚起する。

3. 研究対象

本研究は、1968年以降の『新建築』誌および『住宅特集』誌に掲載された建築家の論考のうち、「余白」の語が用いいら

れ、その概念が本研究における定義に符合し、かつ設計に関わる概念として扱われているものを対象とする。下記に例を挙げる。

伊丹潤は、『余白の家』について、“この空間はまさに、住まうことの余白”であり、“未知なるもの、期せぬものに出会う場”¹⁷⁾と述べている。

竹原義二是、『石壁の家 パレロワイヤル岡本』の「通り庭」を、「余白」として“共有の意識を生みだす”“曖昧な空間”¹⁸⁾と述べている。

青木淳は、『三次市民ホールきりり』の論考において“建築一般に、余白が必要”であり“余白が公共性を担保している”¹⁹⁾と述べている。

杉下均は、『揖斐の住居と工房』のニワを、“人の想像力を広げる場”²⁰⁾としての「余白」であると述べている。

これらは現代建築における「余白」の多様な解釈の一端を示すものである。本稿では、その中で「余白」に継続的に言及し、研究対象となる論考数が最も多い竹原義二の住宅作品に焦点を当てる。

4. 竹原義二の言説にみる「余白」の分析

4.1. 竹原義二の概要

竹原義二(1948-)は、石井修に師事した後、1978年に無有建築工房を設立。その住宅作品は、簡素な都市住宅から郊外の重厚な邸宅まで多岐にわたるが、完成度の一貫した高さ、時間軸に沿った変化ではない共時的な多様性と安定性があると評されている。²¹⁾

4.2. 分析対象と概要

研究対象に含まれる竹原義二による作品の論考、11本(表1)を対象とする。

表1 分析対象論考

番号	掲載号	作品名	竣工年
1	住宅特集 1991年7月号	石壁の家 パレロワイヤル岡本	1991年
2	住宅特集 1991年11月号	吉見ノ里の家	1990年
3	住宅特集 1993年6月号	ドムス桜ヶ丘	1993年
4	住宅特集 1994年3月号	住吉山手の家	1993年
5	住宅特集 2000年3月号	日ノ下商店ビル	1999年
6	住宅特集 2000年9月号	鷺林寺南町の家	2000年
7	住宅特集 2001年9月号	東豊中の家	2001年
8	住宅特集 2002年5月号	明石の家	2001年
9	住宅特集 2007年5月号	宮ノ谷の家	2005年
10	住宅特集 2010年8月号	富士が丘の家	2009年
11	新建築 2013年8月号	大阪ガス実験集合住宅 スマートリノベーション NEXT21 フェーズIV 余白に棲む家	2013年

4.3. 分析方法

上記の11論考を通読し、「余白」の語が使用された言説及び「余白」を叙述する言説を抽出する。さらに各論考において「余白」として言及された建築の部分(通り庭、外室、ピロティ等)に関する言説を加え、意味が変わらない程度に表現や単語を整理及び補完する構造化の作業を行った上で、項目を析出する(表2)。その後、KJ法に準じて鍵語により整理する(表3)ことで、竹原義二の「余白」に関する概念構造を捉える。なお、この言説分析方法は、共著者の末包らによる研究²²⁾²³⁾の方法に準拠したものである。

表2 「余白」に関する項目の析出例

番号	原文	構造化	項目
1-2	共有する「通り庭」は、集住する利点から生み出された空間であり、単体では実現しにくい余白の部分として、各戸へのアプローチに続きながら空間を豊かにしている。	共有する通り庭は、集住する利点から生み出された余白として、空間を豊かにする。	通り庭 集住が生む豊かさ

4.4. 言説にみる「余白」の分析

表3が示すように、言説から析出された項目は第1水準から第4水準までの鍵語に整理された。以降、各鍵語について、構造化した言説を引用しつつ、順に考察を加え、あわせて鍵語間の関係も分析する。なお、本文中の鍵語は第1水準を【】、第2水準を《》、第3水準を[]、第4水準を〈〉で表し、構造化した言説は“”で示した上、言説番号を付す。

4.4.1 【余白の主題】に関する言説の分析 竹原義二の

表3 「余白」に関する鍵語一覧

第1水準【】	第2水準《》	第3水準[]	第4水準〈〉	出典論考
余白の主題	共棲	他者との共棲 自然との共棲 自然の感知	集住が生む豊かさ 共有の意識 他者との共棲 社会の機微への適応 自然と融合した生活 生き物との共棲 自然の機微への適応 自然の見え方の転換 季節の感知	1. 石壁の家 1. 石壁の家 11. 余白に棲む家 11. 余白に棲む家 3. ドムス桜ヶ丘 11. 余白に棲む家 11. 余白に棲む家 4. 住吉山手の家 4. 住吉山手の家
	関係の生成・調整	内外の関係 都市との接点 都市との緩衝帯	内外の新たな関係性 内外の多様な関係性 内外の繋がり 都市との多様な繋がり 都市の体現 建物の表情の柔らげ 都市と住空間の緩衝帯 街との緩衝装置	6. 鷺林寺南町の家 7. 東豊中の家 8. 明石の家 5. 日ノ下商店ビル 11. 余白に棲む家 2. 吉見ノ里の家 5. 日ノ下商店ビル 9. 宮ノ谷の家
	曖昧さ	曖昧な空間 曖昧な境界	曖昧な空間 拡がりのある曖昧な外部空間 曖昧な間 曖昧な接続 内なる外 曖昧な結界	1. 石壁の家 7. 東豊中の家 9. 宮ノ谷の家 6. 鷺林寺南町の家 8. 明石の家 11. 余白に棲む家
	未完結 不均質		完結しない建築 不均質な場の力	10. 富士が丘の家 11. 余白に棲む家
余白の形成手法	平面操作 断面操作 構成形式 部位 素材	セットバック 庭・外室 平面的間・隙間 立体的外部 断面的間・隙間 重層 回遊性 連続する壁 連続する天井 分節する壁 石壁 皮膜	道路からの後退 通り庭 中庭 中間部の外室 皮膜と内部空間の間 引き込まれた半外部 ズレ・スキマ 立体的外室 囲い取られた立体的外部 断面的ズレ 生活の場の下のピロティー 壁の重層 レベル差の重層 空間の重層 廻遊式住宅の形成 最小限のスペースと回遊性 都市の回遊性 連続した壁による囲い フラットにつながる天井 領域を貫く壁 石壁によるすくい取り 透過性のあるパンチングメタル 可動スクリーン	2. 吉見ノ里の家 1. 石壁の家 3. ドムス桜ヶ丘 4. 住吉山手の家 5. 日ノ下商店ビル 11. 余白に棲む家 11. 余白に棲む家 4. 住吉山手の家 8. 明石の家 7. 東豊中の家 10. 富士が丘の家 1. 石壁の家 4. 住吉山手の家 11. 余白に棲む家 4. 住吉山手の家 7. 東豊中の家 11. 余白に棲む家 6. 鷺林寺南町の家 7. 東豊中の家 9. 宮ノ谷の家 1. 石壁の家 4. 住吉山手の家 11. 余白に棲む家 6. 鷺林寺南町の家 7. 東豊中の家 9. 宮ノ谷の家 1. 石壁の家 5. 日ノ下商店ビル 5. 日ノ下商店ビル

「余白」に関する項目は、第1水準でテーマ・目的・意義を示す【余白の主題】と、その主題を実現する具体的操作や仕組みを示す【余白の形成手法】に分類された。まずは、【余白の主題】についての鍵語から分析する。

1) 《共棲》 竹原は、「余白」が共に生きることの豊かさに資することを繰り返し述べている。

「石壁の家 パレロワイヤル岡本」(以下、「石壁の家」とする)の論考において、戸建てに近い集合住宅の価値を語る中で、“通り庭は集住する利点から生み出された余白の部分として、空間を豊かにする(1-2)”ものあり、“戸を集合させる結節空間として共有の意識を生み出す。(1-3)”とし、【他者との共棲】することの価値が「余白」として現れ、各住戸を結びつけると述べる。

また、「大阪ガス実験集合住宅スマートリノベーションNEXT21 フェーズIV 余白に棲む家」(以下、「余白に棲む家」とする)においては、“既製の枠組みや境界とのズレやスキ

マによる「余白」は、曖昧な結界を結び、他者や生き物との共棲住宅をつくり出す。(11-1)"と、[他者との共棲]と[自然との共棲]について語っている。ここでは、後述の【余白の形成手法】にあたる[平面的間・隙間]が[曖昧な境界]を生み、それによって《共棲》の場が生まれるという関係が読み取れる。

2) **《自然の感知》** 「住吉山手の家」の論考において、「余白」としての外室を中心としたレベル差が重層する廻遊式住居の意図を、“自然の見え方をリニアからラウンドなものへ転換させるよう、各室がレベル差もって重層し、立体的な空間をつくりだす。(4-3)” “内室と外室(余白)を廻遊することによって、その時どきの季節を感じ、生活は豊かなものになる。(4-4)”と述べ、「余白」が〈季節の感知〉、〈自然の見え方の転換〉という《自然の感知》に寄与し、それが後述の[回遊性]、[重層]という【余白の形成手法】の複合によって実現するとする。

3) **《関係の生成・調整》** 異なる性質を持った空間の《関係の生成・調整》する役割としての「余白」について述べられている。

「鷺林寺南町の家」では、無造作な雑壇状の造成地という敷地の印象を転換するため、“建物の外側の余白が新たなレベル差と関係性をもった外部空間として、内部空間つなぐことが可能かを考えることから始まった。(6-1)”とし、「余白」を単なる残余でなく、新たな[内外の関係]が生まれる場とすることによる住空間の豊かさが目指されている。

また、「日ノ下商店ビル」では、“内側だけに閉じこもらず、都市との多様な繋がり方を可能にすることが必要である。(5-3)”とし、都市居住における[都市との接点]としての「余白」の重要性を提示する。

一方で、「宮ノ谷の家」においては、“スラブ下を貫く1枚の壁は、道路との間に曖昧な余白を生み出し、街との間に中間領域をつくる緩衝装置となっている。(9-1)”とし、[都市との緩衝帯]としての「余白」が街と適度な距離を取る調整機能を担うことが示されている。

4) **《曖昧さ》** 竹原が「余白」に紐づける空間像の一つとして、《曖昧さ》が繰り返し語られている。

「石壁の家」においては、自立する[石壁]の意味を語る文脈の中で、“石壁が余白の曖昧な空間をかたちづくっている。(1-4)”と述べる。自立する石壁が内外を横断することによって、境界を曖昧にするとともに、住み手のさまざまな思いが交錯すると語られ、前述の[他者との共棲]による豊かさへと繋がっていく。

また、「明石の家」においては、内外空間の視線の連続性を語った上で、“立体的な余白の空間が、中庭をより内なるものとして意識させ、内と外をつなぐ。(8-1)”とし、「余白」が〈内なる外〉として、[曖昧な境界]を生み、[内外の関係]を誘発することが述べられている。

どちらも、他者や外部という外的なものを受け入れて関係を結ぶ空間として、《曖昧さ》を持った「余白」が示されている。

5) **《未完結》** 「富士が丘の家」において、建主が非日常性のある空間を求めたことに触れつつ、“生活の場をもち上げることでできたピロティーを、地面に接した生活をする時まで余白として残し、完結しない建築の楽しみとし

て生かす。(10-1)”と述べ、「余白」が将来的な拡張可能性を担保し、時間経過に応じた変化の空間として〈完結しない建築〉の想起を促すことを示している。

6) **《不均質》** 「余白に棲む家」において、都市居住が《共棲》の拠点として再認識されているとした上で、“「余白」はまっさらな空間ではなく、重層する空間によってもたらされる自然環境と素材や色彩によって、不均質な場の力が再現される。(11-2)”述べる。つまり、自然環境と設えの複合による濃淡のある空間が、都市住宅において必要な「余白」であり、ひいては《共棲》にとって、重要であると語られている。前述の《曖昧さ》および《未完結》といった鍵語からも、まっさらな空間ではない「余白」への志向が読み取れる。

4.4.2 【余白の形成手法】に関する言説の分析 続いて、主題を実現するための具体的操作や仕組みを示す【余白の形成手法】についての鍵語を分析する。

1) **《平面操作》** 《平面操作》として、建物の[セットバック]による緑の「余白」、[庭・外室]の配置による「余白」、〈皮膜と内部空間の間〉や〈ズレ・スキマ〉として表現される[平面的間・隙間]による「余白」の形成が確認できる。

“建物を前面道路より後退させて生まれた緑の余白は、道路と建物との「間」を保ち、建物の表情を柔らげる。(2-1)”のように、《平面操作》による「余白」が直接【余白の主題】(ここでは《関係の生成・調整》)へ応答する例がある一方、“中間部に生み出した余白部を家の核として廻遊式住宅を形成している。(4-1)”のように、後述する《構成形式》の[回遊性]へと展開する例もみられる。

2) **《断面操作》** 《断面操作》として、[立体的外部]としての「余白」、[断面的間・隙間]による「余白」の生成が確認できる。

“外室(余白)は、立体的なもので、レベルの違う室、テラスへのアプローチを可能にし、各室は外室を通して対峙する。(4-2)”で示される[立体的外部]も、《構成形式》における[回遊性]の軸として語られている。

“断面的なズレと、低くフラットにつながる天井によって、(残された余白に)拡がりのある曖昧な外部空間を存在させる。(7-2)”では、[断面的間・隙間]による「余白」が、《曖昧さ》に寄与するものとして語られている。

3) **《構成形式》** 平面的・断面的に生成された「余白」に特質性を与える《構成形式》として、[重層]と[回遊性]が論じられる。

[重層]は、“(余白としての)庭を構成する石積みの壁と塗り壁をセットバックさせ、重層させることによって奥行きと広がりを持たせる。(1-1)”とする〈壁の重層〉、 “自然の見え方をリニアからラウンドなものへ転換させるよう、各室がレベル差もって重層し、立体的な空間をつくりだす。(4-3)”とする〈レベル差の重層〉，“「余白」はまっさらな空間ではなく、重層する空間によってもたらされる自然環境と素材や色彩によって、不均質な場の力が再現される。(11-2)”とする〈空間の重層〉が挙げられる。

[重層]の対象は統一されていないものの、概念としては繰り返し言及され、「余白」に特質性を与える手法として機能している。

〔回遊性〕は、“中間部に生み出した余白部を家の核と

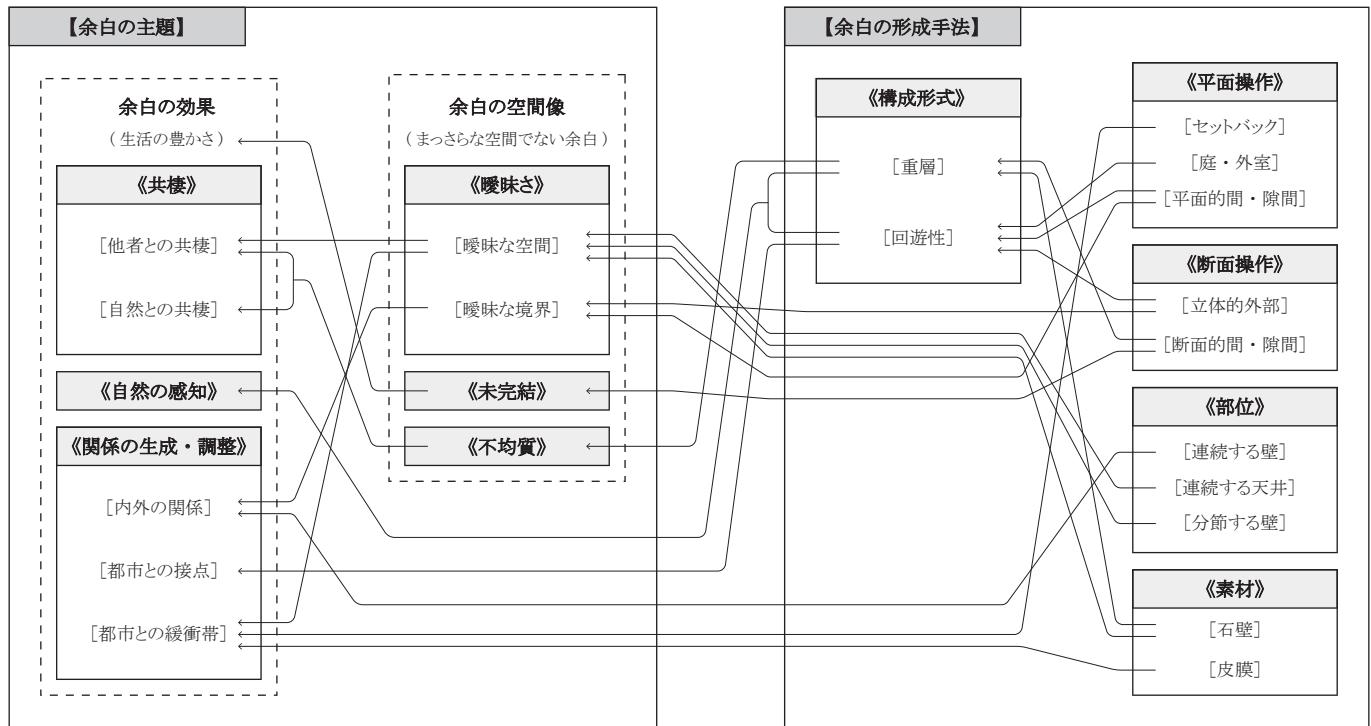


図1 竹原義二の言説による「余白」の概念構造図

して廻遊式住宅を形成している。(4-1)"とする「余白」を中心とした「回遊性」と、「室」に重ね着をするように引き込まれた「余白」が、都市の回遊性を体現する。(11-3)"とする「余白」自体が担う「回遊性」がそれぞれ述べられる。

また、《自然の感知》の項でも指摘したように、[重層]と[回遊性]の複合が、「住吉山手の家」、「余白に棲む家」において試みられている。

4)《部位》 “新たに低く抑えた擁壁が既存の地面を切り取り、連続した「壁」として（余白としての）外部空間を囲い取る。(6-2)"にみられる[連続する壁]、"断面的なズレと、低くフラットにつながる天井によって、（残された余白に）拡がりのある曖昧な外部空間を存在させる。(7-2)"にみられる[連続する天井]、"スラブ下を貫く1枚の壁は、道路との間に曖昧な余白を生み出し、街との間に中間領域をつくる緩衝装置となっている。(9-1)"にみられる[分節する壁]が【余白の形成手法】に関する《部位》として挙げられる。これらはいずれも【余白の主題】の《曖昧さ》を具体化するための要素として位置づけられている。

5)《素材》 “石壁が余白の曖昧な空間をかたちづくっている。(1-4)"にみられる[石壁]、"透過性のあるパンチングメタルと可動スクリーンが皮膜として、内側に設けた（余白としての）外部空間に開放感と自由度を与えていた。(5-1)"にみられる[皮膜]としての〈透過性のあるパンチングメタル〉と〈可動スクリーン〉が「余白」の《素材》として挙げられ、前者は【余白の主題】の《曖昧さ》に、後者は【余白の主題】の[都市との緩衝帶]に寄与するものとして語られている。

4.5. 考察

以上の分析から得られた概念構造を図1として示す。竹

原の言説における【余白の主題】は、「余白の効果」と「余白の空間像」に大別して整理された。「余白の効果」を示す鍵語は、生活の豊かさに結びつく《共棲》《自然の感知》《関係の生成・調整》である。これに対し「余白の空間像」を表す鍵語は、竹原のいう「まっさらな空間でない余白」を特徴づける《曖昧さ》《未完結》《不均質》である。これらの意味についての考察と、他の鍵語との関係の考察によって、竹原が、

《曖昧さ》を伴う「余白」：

外的なものを受け入れて関係を結ぶ空間

《未完結》を伴う「余白」：

時間経過に応じた変化の空間

《不均質》を伴う「余白」：

自然環境と設えの複合による濃淡のある空間

と捉えていることが理解された。さらに、これら「余白の空間像」の具体化を通じて「余白の効果」（生活の豊かさ）が実現されるという論理構造を確認した。

次に【余白の形成手法】においては、《構成形式》である[重層]と[回遊性]が、それぞれ複数の具体的な形成手法と関連づけられており、これらが中心的な手法として機能していることが明らかになった。

以上のことから「余白の空間像」と《構成形式》が、竹原の多様な設計手法を統合する枠組みとして機能し、目標である「余白の効果」（生活の豊かさ）が追求されている構造が示された。

5. 竹原義二の住宅作品にみる「余白」の分析

本章では、言説分析を通して把握した竹原の「余白」の概念のうち、とりわけその中核をなす【余白の主題】の「余白の空間像」（《曖昧さ》《未完結》《不均質》）が、《構成形

式》(〔重層〕〔回遊性〕)を中心とした【余白の形成手法】によって、いかに具現化されているかを分析する。

5.1. 分析対象と概要

《構成形式》である〔重層〕と〔回遊性〕の両方に言及がある住宅作品、「住吉山手の家」と「大阪ガス実験集合住宅スマートリノベーション NEXT21 フェーズIV 余白に棲む家」の2作品を分析対象とする。表4に概要を示す。

表4 分析対象作品概要

作品名	概要	
住吉山手の家	竣工年	1993年
	所在地	兵庫県神戸市東灘区
	敷地面積	241.28 m ²
	建築面積/延床面積	94.37 m ² /188.27 m ²
	構造	RC壁式構造+木造
	階数	地下1階 地上2階
大阪ガス実験集合住宅スマートリノベーション NEXT21 フェーズIV 余白に棲む家	竣工年	2013年
	所在地	大阪府大阪市天王寺区
	構造	PC+RC複合構法
	建物階数	地下1階 地上6階
	住戸位置	3階 305住戸
	住戸床面積	87.26 m ²

5.2. 分析方法

図面および竣工写真をもとに、まずは竹原が論じる「余白」に該当する部分を特定した上で、【余白の主題】の「余白の空間像」(《曖昧さ》《未完結》《不均質》)が、《構成形式》(〔重層〕〔回遊性〕)を中心とした【余白の形成手法】についていかに実現されているかに着目して考察する。なお、本稿では図面を基に作成したアイソメトリック図により考察の要点を示す。

5.3. 「住吉山手の家」における「余白」の分析

5.3.1 「余白」の特定

「住吉山手の家」の論考では、

“全体は南北に3分割されており、中間部に外部空間としての余白部(外室)を生み出した。この余白部を家の核として廻遊式住居を形成している。”と記され、中央に設けられた外室が竹原の考える「余白」と特定できる。図2では、塗りつぶし部分がこれに相当する。

5.3.2 《曖昧さ》を伴う「余白」 「余白」は、コの字状に配された建築と〈分節する壁〉によって囲われ、〔重層〕的空間の核となる「内部の外部」という〔曖昧な空間〕を形成している。さらに、「余白」へ接続する階段を延長するように組まれた段状の床や、内部と「余白」の間に軒をもつ露地空間によって、壁による明確な境界ではない〔曖昧な境界〕が生じている。加えて、「余白」を中心とした〈レベル差の重層〉を伴う〔回遊性〕により、この〔曖昧な境界〕を通過する動線が生まれ、「余白」に流入する自然環境が建築全体の体験へと広がる効果が促進されている。

5.3.3 《未完結》を伴う「余白」 「富士が丘の家」にみられる拡張可能性を担保する意味での《未完結》は確認できない。しかし、より広義には、時間経過に応じた変化としての《未完結》を、「余白」に配された植栽の成長や《素材》の経年変化に見出せる。

5.3.4 《不均質》を伴う「余白」 「余白」の周囲には、〈レベル差の重層〉をつなぐ階段が現れ、四面それぞれに形状も大きさも異なる開口が設けられている。さらに、〔重層〕的平面構成がもたらす各室との多様な関係、とりわけ奥行きの差異に起因する陰影の濃淡が、《不均質》な空間を形成している。また、露地空間の床に敷き込まれた三和土と石材、外壁のコンクリート打放し仕上げとアクリル樹脂仕上げの組合せといった《素材》，および「余白」の段上に配された植栽の複合によっても、《不均質》な表情が生まれている。

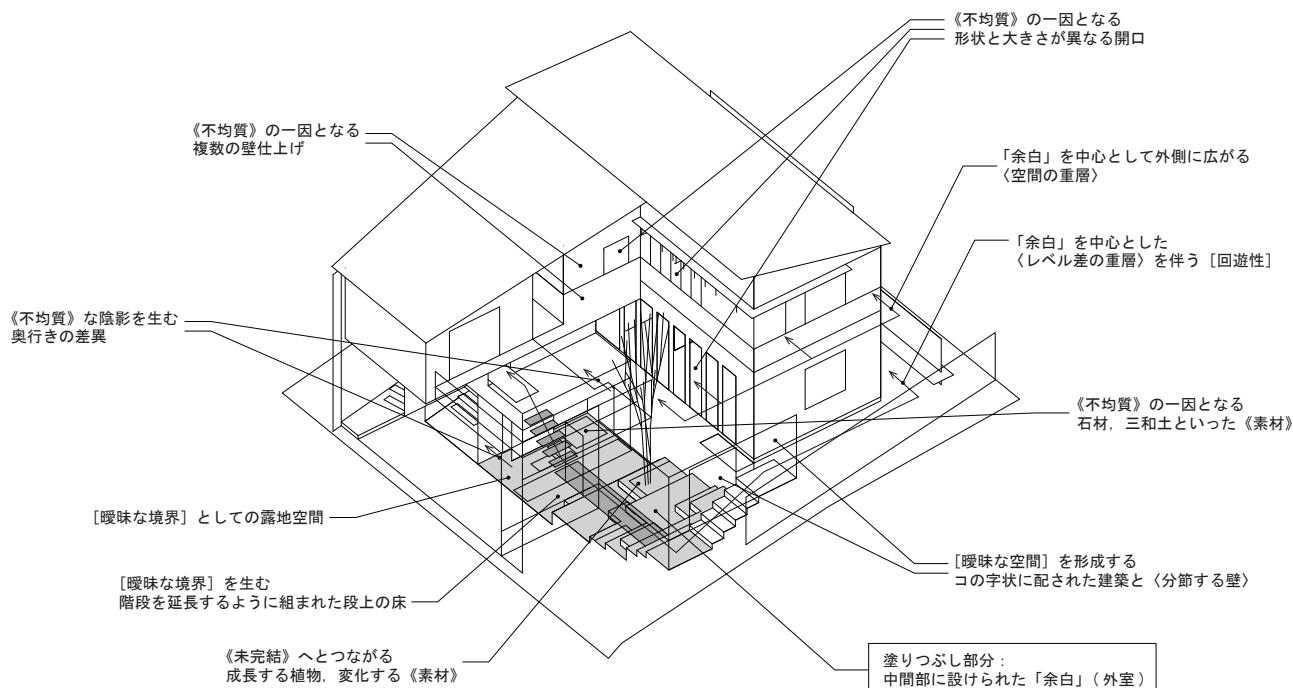


図2 住吉山手の家 アイソメトリック図

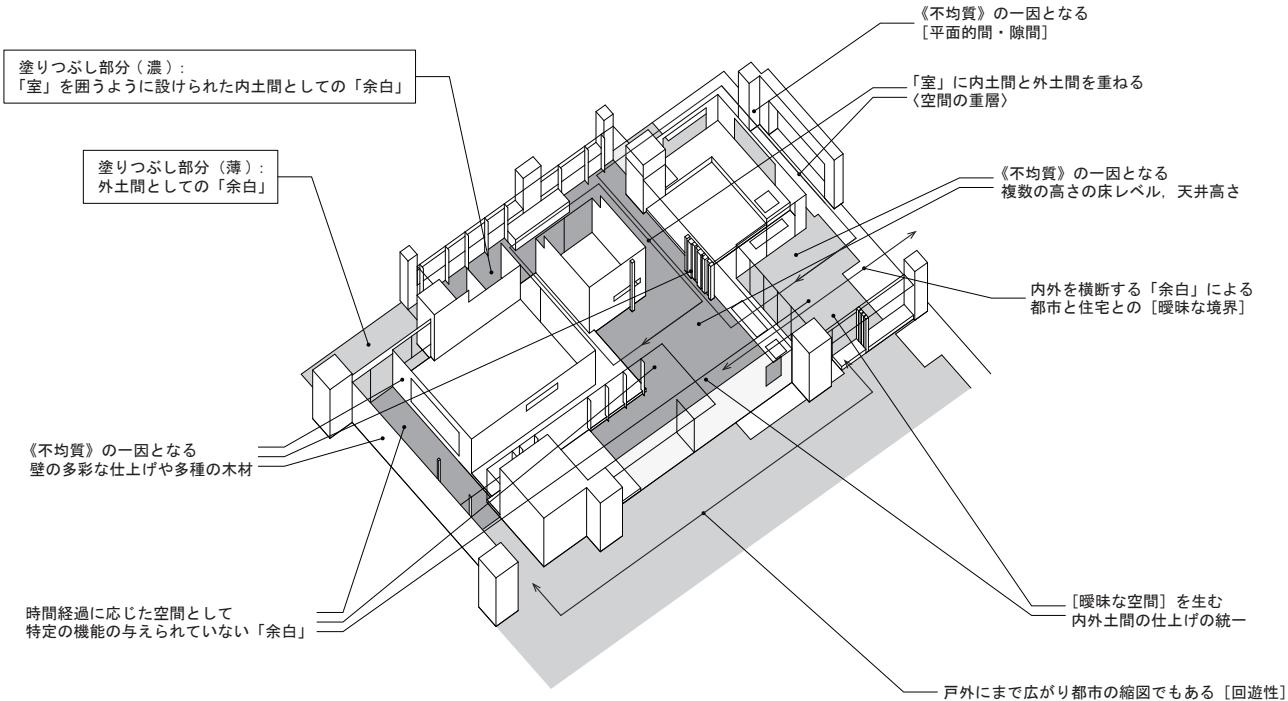


図3 余白に棲む家 アイソメトリック図

5.3.5 考察 「住吉山手の家」においては、核としての「余白」とその周囲に配された室が相互に関係づけられている。〈レベル差の重層〉による高低差の連続が「余白」と室を緩やかに接続し、〈空間の重層〉による室の奥行きの違いによる境界操作が、「余白」の周囲に《曖昧さ》と《不均質》を生み出している。そこに〔回遊性〕が加わることで、体験が建築全体へと広がり、《自然の感知》を中心とした生活の豊かさへと繋がっている。

5.4. 「余白に棲む家」における「余白」の分析

5.4.1 「余白」の特定 「余白に棲む家」の論考内では、「余白」がどの部分を指すか明示されていないが、新建築誌に掲載のスケッチに添えられた解説に、 “様々なカタチをもつ「室」が入れ子状にズレながら点在し、「余白」として残された多様な「土間」空間がおおらかな一室空間を形成する。” と記されており、内外にわたる土間空間が竹原の考える「余白」と特定できる。図3では、塗りつぶし部分がこれに相当する。

5.4.2 《曖昧さ》を伴う「余白」 「室」の周囲に、内土間としての「余白」と外土間としての「余白」を重ねる〈空間の重層〉がみられ、内外を横断する「余白」が都市と住宅との〔曖昧な境界〕を形づくっている。内外に共通する土間仕上げにより、内部の「余白」は外部の一部のように感じられ、一方で外部の「余白」は建築の構造体による囲いによって都市に対して内的な「余白」となり、〔曖昧な空間〕を生み出している。

この《曖昧さ》を通じて、都市の隣人、同じ階の住人、戸内の家族といった多様な〔他者との共棲〕、植物や光、風、熱、音といった都市環境も含めた〔自然との共棲〕が志向されているとみられる。

5.4.3 《未完結》を伴う「余白」

「住吉山手の家」と

同様に、「富士が丘の家」にみられる拡張可能性を担保する意味での《未完結》は確認されない。一方で、「余白」は単に内土間・外土間としてのみ表記され、特定の機能は与えられていないため、季節の変化、生活の変化という短期的・中期的な時間経過に応ずる空間であることが読み取れる。「室」の周りを囲う「余白」によって生み出される〔回遊性〕が居住者の移動を促し、変化そのものが「生活の豊かさ」へと昇華されていると捉えられる。

5.4.4 《不均質》を伴う「余白」 建築外周や構造体と、「室」との〔平面的間・隙間〕によって形成された「余白」は、様々なサイズとプロポーションを持っている。また、「余白」の床レベルは複数の高さに設定され、天井高の違いと合わせて、〔断面的間・隙間〕としての多様性が与えられている。

さらに、〈空間の重層〉がもたらす奥行きの違いに起因する陰影の濃淡、壁の多様な色彩、仕上げに用いられた多種の木材、それらの複合によって《不均質》な「余白」が生み出されている。

5.4.5 考察 「余白に棲む家」では、「室」の周囲に内土間・外土間という二重の「余白」が設けられ、そのさらに外縁に都市空間が重なる関係にある。「余白」は、「室」と都市のあいだを媒介する空間として、滞在する場であると同時に、〔回遊性〕を担う移動空間であり、〔重層〕する層の一部であり、建築周囲の動的な都市空間の縮図として〔都市との接点〕でもある。空間構成と多様な仕上げに加え、複数の意味が重ねられた空間としての《曖昧さ》が、外的なものとの《共棲》を支えている。

6. まとめ

本稿は、『現代建築作品における「余白」の概念に関する

研究（その2）として、研究対象の中から論考数が最も多い竹原義二の住宅作品に焦点を当てた。

竹原による作品の論考、11本を精読し、言説の抽出と構造化の作業によって析出された項目は、KJ法によるプロセスを経て、第1水準から第4水準までの鍵語に整理された。その後、各鍵語と鍵語間の関係の考察によって、竹原による「余白」の構造概念を捉えた。【余白の主題】は「余白の効果」（《共棲》《自然の感知》《関係の生成・調整》）と、「余白の空間像」（《曖昧さ》《未完結》《不均質》）に大別され、【余白の形成手法】は《構成形式》（〔重層〕〔回遊性〕）が中心となり、複数の具体的な形成手法と関連づけられていた。さらに「余白の空間像」と《構成形式》が、竹原の多彩な設計手法を統合する枠組みとなっていることが把握された。

次に、二つの住宅作品の図面および竣工写真の分析を通して、上記の枠組みが実際にどう働いているかを確認した。両事例を比較すると、「住吉山手の家」は、室の内側に設けた外室としての「余白」が自然を引き込み、建築全体へと広げる構成であるのに対し、「余白に棲む家」は、室の外側に設けられた内土間・外土間という二重の「余白」によって、周囲の都市環境と自然を緩やかに浸透させる構成であった。一方で、どちらの事例においても、〔重層〕と〔回遊性〕の複合によって《曖昧さ》《未完結》《不均質》という「余白の空間像」が具体化していることが確認できた。《曖昧さ》は他者・自然・都市の気配を選択的に受け入れる性質として現れ、《未完結》は用途の過度な固定を避ける設えや経時変化を通じた小さな更新として、《不均質》は自然環境の引込、素材の組み合わせ、微細なレベル差、開口のスケールや奥行による陰影の濃淡として立ち上がっている。以上より、竹原の「余白」は、外的なものを受け入れつつ、多彩な要素の複合によって関係を調整し、時間とともに更新されるものとされていることが分かった。

前稿の安藤および本稿の竹原の分析を通して、現代建築における「余白」は、単なる残余部分ではなく、空間構成の中核として機能する設計要素であることが確認できた。今後は、引き続き現代の建築家による「余白」についての論考の分析を進め、「余白」の概念構造と設計手法の整理を深めることで、さらなる「余白」の可能性を探っていく。

文 献

- (1) 新村出(編)：広辞苑 第七版、岩波書店, p.3037, 2023.
- (2) Masahiko INOUE, Shingo SUEKANE, Ryo MASUOKA, Sara GOTO : Analysis of "YOHAKU" in Architectural Works Designed by Tadao Ando from 1977 to 1983 : A Study on the Concept of "YOHAKU" in Contemporary Architectural Works (Part 1) , Proceedings 14th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, B-2-4, 2024.9.
- (3) 岡倉天心：新約 茶の本、大久保嵩樹(訳), 角川文庫, p.66, 2005 (原著 1906).
- (4) 大久保嵩樹:余白と座—日本的心性の展開 その三、東京女子大学紀要論集 65 (2), pp.31-61, 2015.
- (5) 西田幾多郎：形而上学的立場から見た東西古代の文化形態、哲学の根本問題 続編 弁証法的世界、岩波書店, p.281, 2005 (原著 1934).

- (6) ジャック・デリダ:哲学の余白、高橋允昭/藤本一勇(訳), 法政大学出版会, p.19, 1997 (原著 1984).
- (7) 藤本一勇：訳者あとがき、ジャック・デリダ：哲学の余白、高橋允昭/藤本一勇(訳), 法政大学出版局, p.366, 1997 (原著 1984).
- (8) カジミール・マレーヴィッヂ：無対象の世界、五十鈴利治(訳), 中央公論美術出版, p.74, 2020 (原著 1923).
- (9) 李禹煥：両義の表現、みすず書房, p.97, 2021.
- (10) ステファヌ・マラルメ：賽の一振り、柏倉康夫(訳), 月曜社, p.30, 2022 (原著 1897).
- (11) 金澤一志(監修)：カバンのなかの月夜 北園克衛の造型詩、国書刊行会, p.53, 2002.
- (12) 新村出(編)：広辞苑 第七版、岩波書店, p.818, 2023.
- (13) 新村出(編)：広辞苑 第七版、岩波書店, p.753, 2023.
- (14) 新村出(編)：広辞苑 第七版、岩波書店, p.2844, 2023.
- (15) 新村出(編)：広辞苑 第七版、岩波書店, p.1236, 2023.
- (16) 新村出(編)：広辞苑 第七版、岩波書店, p.2734, 2023.
- (17) 伊丹潤：余白の家、新建築 1975年12月号, p. 204, 1975.12.
- (18) 竹原義二：石壁の家 パレロワイヤル岡本、住宅特集 1991年7月号, p. 77, 1991.7.
- (19) 青木淳：三次市民ホール きりり、新建築 2015年5月号, p. 216, 2015.5.
- (20) 杉下均、出口佳子：揖斐の住居と工房、住宅特集 2017年10月号, p. 122, 2017.10.
- (21) 花田佳明：「建築」家・竹原義二、竹原義二：竹原義二の住宅建築、TOTO出版, 2010.
- (22) 末包伸吾：主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷、日本建築学会計画系論文集, vol.73, No.627, pp.1155-1164, 2008.5.
- (23) 後藤沙羅、末包伸吾、増岡亮：伊丹潤の言説における【現代日本】の《建築》に関する思想、日本建築学会計画系論文集, vol.87, No.799, pp.1774-1785, 2022.9.